

成果報告書

地域文化倶楽部(仮称)創設支援事業

団体名	学びファシリテーション																
所在地	喜多方市	設立年	2022年														
運営主体	学びファシリテーション																
事業目標	今年度事業の目標 「文化芸術関係の部活動で実施できるプログラムの開発と検証を行う」																
きっかけ	芸術分野に触れる機会が限られていくことを部活動の地域移行の話の中で知り、少しでも貢献できるのであればと思い、団体を立ち上げた。																
団体・組織等の連携	<table border="1"> <thead> <tr> <th>団体名</th> <th>本事業における関わり方</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>喜多方市教育委員会</td> <td>事業への後方支援、美術館業務監理</td> </tr> <tr> <td>喜多方市立第一中学校</td> <td>部活動の活動の場提供、美術教員参加、教育プログラム開発</td> </tr> <tr> <td>喜多方市美術館</td> <td>美術展会場提供、学芸員（講師）派遣</td> </tr> <tr> <td>学びファシリテーション</td> <td>事業コーディネート、教育プログラム開発</td> </tr> <tr> <td>技術を持った個人（市内在住）</td> <td>美術家、グラフィックデザイナー、工芸家</td> </tr> <tr> <td>東北芸術工科大学</td> <td>学術的なインプット、評価</td> </tr> </tbody> </table>			団体名	本事業における関わり方	喜多方市教育委員会	事業への後方支援、美術館業務監理	喜多方市立第一中学校	部活動の活動の場提供、美術教員参加、教育プログラム開発	喜多方市美術館	美術展会場提供、学芸員（講師）派遣	学びファシリテーション	事業コーディネート、教育プログラム開発	技術を持った個人（市内在住）	美術家、グラフィックデザイナー、工芸家	東北芸術工科大学	学術的なインプット、評価
団体名	本事業における関わり方																
喜多方市教育委員会	事業への後方支援、美術館業務監理																
喜多方市立第一中学校	部活動の活動の場提供、美術教員参加、教育プログラム開発																
喜多方市美術館	美術展会場提供、学芸員（講師）派遣																
学びファシリテーション	事業コーディネート、教育プログラム開発																
技術を持った個人（市内在住）	美術家、グラフィックデザイナー、工芸家																
東北芸術工科大学	学術的なインプット、評価																
活動場所	中学校内の教室																
活動概要	<p>学びファシリテーションは本事業の開始に合わせて設立された。事業外にも、文化、芸術、国際分野での学びの提供をしていくことを目的としている。</p> <p>本事業では、4つの講座(版画、漆工芸、メイク、鑑賞)を企画し、実施した。また夏休みには校外活動として、美術展訪問やフォトスタジオでセルフポートレートをするなどの活動を実施した。(全21回)また通信を3回発行し、保護者にも活動の様子が見えるようにした。</p>																

○本事業による成果

- ・市民が講師として部活動の指導が週一回ほどできた。
- ・学校と市民が協働で、生徒たちに教育プログラムを提供できるコーディネートができた。
- ・学校が教育的観点を担うのではなく、主体団体のプログラム内容を受け入れてもらえ、学校との協働においても市民の意向が入った教育プログラムを提供できた。(今までは、市民は技能のみを提供するというものだと思っていました)
- ・本活動が市全体で考える 이슈となるきっかけを与えることができた。
- ・本団体、講師に1年の経験が蓄積され、この形をもとにした活動ができる意識が醸成された。
- ・県地方紙2紙から、部活動地域移行の文脈で取材され、記事にされた。それにより県内でも珍しい文化系部活動の本活動が広く知れ渡った。
- ・受講した生徒の母親から直接連絡を受け、今回のプログラムを受けられてよかった旨を伝えられた。

【生徒へのアンケート結果】

- ・受講の満足度について(n=12)

プログラム全体としての満足度は「満足」75%、「やや満足」17%、「不満」8%であった。

個別の講座についてもすべて90%（「満足」「やや満足」を含む）を超える満足度だった。

- ・生徒たちの意識変化について(n=6)

「高校や大人になってからも、芸術活動を続けていきたいか」というアンケートを、本年度活動当初と最終講座内で取った。アンケート母数が少ないのは、3年生は途中で部活を終了したことと、アクティブに参加する生徒の入れ替わりがあるため。もちろん、当初と最終講座内で取ったアンケートは同人物での比較である。

問「文芸部に関係した芸術活動を高校でも続けたいか」

回答(当初)「続けたい」1名 「続けたくない」5名

(事後)「続けたい」4名 「続けたくない」2名

問「文芸部に関係した芸術活動を社会人になっても続けていきたいか」

回答(当初)「続けたい」1名 「続けたくない」5名

(事後)「続けたい」3名 「続けたくない」3名

母数が少ないので精度を持った分析は難しいが、芸術活動に前向きな印象を持った生徒が多くなったことは、私たちが活動続ける原動力となる。今後の活動で同じアンケートを取り、受講後に子どもたちにどのような変化が起こるのかはデータとして蓄積していきたい。

部活動が学校から地域に出ることは、より成果が求められることだと考えている。そのためには何らかの客観的データで有用性を示していく必要がある。どのような評価方法が良いのか、どのような評価項目が良いのか、自分たちの目指すところと市場のニーズを見極めながら、自分たちなりの評価法を作っていく。

○児童・生徒への指導に関する工夫

上記アンケート結果でも示したとおり、受講生徒の満足度は高かった。コンテンツへの嗜好性や講師の対応なのか、その他支援スタッフとの相性なのかは分からないが、私たちとして以下のことに気を付けた。

【講座の振り返りは頻繁に行った】

顧問の先生を含め、講師以外にもサポートスタッフとで講座で感じたことを共有した。生徒の反応なども共有することで、一方的な講座や、作業の難易度などの調整も行った。

【初心者講師へコンサルテーションを行った】

初めに、団体で作成したチャートを埋めてもらい、教えることができる技術から、講座で教えることから、生徒が学習することを視覚化した。それをもとに団体代表が講座組み立ての話し合いをした。最終的には「自分が何を教えるか」でなく「生徒が何を学ぶか」、その先の獲得能力について、講師にも意識してもらうようにした。

【「生徒の話を聞く」を優先した】

押さえつける指導でなく、生徒たちが内面にもっているものを共有してもよい「安心」の環境作りを意識した。サポートスタッフもいるため、大人の数が多いためか生徒たちが大人に話す回数が多かったと主観であるが感じる。あるサポートスタッフは、生徒から薦められたアニメを全24話+映画(2時間)を楽しみながら観たという。それをまた生徒にフィードバックした。「大人→子ども」という軸でなく、「子ども→大人」もあり得ることを示したことは、「安心」の環境には大きいと感じている。

○運営上の工夫

本年度はプログラム開発を目標としていたので、その観点から述べていく。

【市民と学校との協働ができた】

学校と地域とのつながりや協働についての議論は盛んになってきたが、印象としてはまだまだ学校の事情が優先されているように感じる。つまり学校が求めることを、市民はボランティア的に行うというのがイメージであった。今回の活動では、講座コンテンツはすべて市民によって作られた。そして、学校内で市民の考えで講座を生徒に向けて実施できた。「教育」という視点は教師が担当しなければならないという考えではない、少し違う可能性を示すことができた。このような信頼関係が他所でもできれば、市内の部活動顧問の負担軽減になるだろう。

【コンテンツに幅を持たすことができた】

職業美術家の個展に行って美術家と会ったり、フォトスタジオでセルフポートレートを撮ったりなど、新しいことがらを生徒に提供することができた。社会ではメタバースやNFTなど、新たな技術が作り出す芸術が多くあるが、学校での芸術の幅は何世代前のものときほど変わっていない。今後もっと生活に即した講座を提供していきたいと考えているので、その一端を試すことができた。生徒の評価において、セルフポートレートが一番評価が高かった。

【企業との協働ができた】

セルフポートレートで撮った写真のプリントで、会津に支店をもつ「セイコーエプソン」に協力いただき、「プリンタ」3台「インク」「写真仕上りの用紙」を提供してもらった。資金的な支援も助かるが、一度だけ使用する機材や資材を協力してもらえたことは助かった。講座コンテンツが増えていくと、一時的に使用するものが増えると考えられる。その際には物的支援を得意分野とする企業に求めることは必要だと考える。

【評価への意識をもった】

公的支援の枠組みがなにも決まっていない状態では、資金的がなくとも運営できる形を試行していく必要がある。実施主体のボランティアを進めて、先細りしていく団体を多くみていると、受益者負担つまりビジネスの形を取っていく方が継続的であると考えた。そのためには、プログラムを受講することでどのように子どもたちが変化するか、その見える化が必要だと考えている。ルーブリックによる評価まだに行きつかなかったが、受講生とが落ち着いたときには実施していきたい。また、事前事後のアンケートによりその変化を見るものも実施していきたい。(今回はその一部を試行した)

○継続的な運営に関する課題・展望

この点について課題は山積であり、その課題を一度に解決することはほぼ不可能であろう。「小さな成功」のケースをまず作り、その上に一つずつ課題解決のための施策を付加していくアプローチを取っていこうと考えた。

制度につながるどころではなく、一民間として扱える身の回りの課題について言及していく。また国等の方針が変更、明確化されるごとに修正を加えていく。

【人】

本年度は代表のつながりから講師をお願いした。それだけでも十分講師人材を確保できた。コーディネートやマッチングは難易度が高く、負荷のかかる業務であるため、まずは手の届く人材に講師をお願いしていく。地域の他組織との連携は「小さな成功」を見てもらい、主体的に賛同してもらえる方々といく形を取れるようにしたい。

【モノ】

本年度は補助金があったため、不自由なく資材を調達できた。プリンタのケースのように、資材調達を企業にお願いできるように、少しずつ地域の企業と関係を結んでいく。

【金】

本年度は補助金があったため、実施できたのが正直なところだ。今後は受益者負担に移行していきたい。そのためにはプログラムの充実と見える化、そして地域での評価をもらっていく必要がある。

【場】

本年度は一学校の部活動に入っただけの活動であったため、学校の教室を無償で使うことができた。地域移行ということになれば、現制度では教室を使うのも難しくなるだろう。公民館は低価格で使用できるので、一つのオプションとして考えている。また代表が所有する蔵が使用されていないので、リノベーションするのも可能性としてある。

○令和5年度からの学校部活動の段階的な地域移行に関する方針・提案

「継続的な運営に関する課題・展望」で述べたことの繰り返しになるが、記していく。

【人】

講師人材の確保は、まずは手の届く人材に講師をお願いしていく。地域の他組織との連携は「小さな成功」を見てもらい、主体的に賛同してもらえる方々といく形を取れるようにしたい。

令和5年度は場所を部活動でなく、学校外で行っていくため、参加者募集の方法を考える必要がある。教育委員会から学校に募集チラシを配布してもらう計画である。

【モノ】

細かな資材については購入し、一過性の機材等は企業との協働でなんとかしたい。そのために少しずつ地域の企業と関係を結んでいく。

【金】

「学校教育の部活動」の継続なのか、一般的な「社会教育の一環」なのかで、公的支援の枠組みも変わってくると考えている。それにはまだ時間がかかるので、さしあたり「受益者負担」を基本に据えた。そのためにはプログラムの充実と見える化、そして地域での評価をもらっていく必要がある。

【場】

現状でも体育館や運動場を市民が使用することはあるが、教室を使用するのは少しハードルが上がるだろう。その際、学校、教育委員会、PTA等の複数団体との交渉と関係構築が必要となる。全国の各民間団体がこれらの組織と交渉するのは合理的でないので、このあたりは国での制度支援が必要である。

現状、割ける時間・労力からすると、公民館は低価格で使用できるので、一つのオプションとして考えている。また代表が所有する蔵が使用されていないので、リノベーションするのも可能性としてある。

○令和4年度 取組状況等

参加者	人数等	
	学校名	
	募集方法	一中学校の部活動に参加している生徒を対象とした
指導者	人数等	
	募集方法	
参加者の移動手段		学校の部活動内
活動費用	指導者謝金等	
	その他	
活動財源	会費	
	その他	
スケジュール	基本活動	
	年間	
保険加入等		学校の活動内であるため、学校で入っている保険でカバーされた

【活動の様子（写真添付）】

【美術(版画)】



【工芸(漆)】



【鑑賞等】



【検討会】



【一番の人気講座・セルフポートレート】

